教　師

貝山久子

昨夏女高師時代のクラスメートの１人が亡くなった．彼女は卒業後間もなく養父母を亡くし，私立高校の教師であった夫君とも７～８年前に死別している．子供にも恵まれなかったから肉身の縁に薄く，また彼女自身も病身であったことから最近は生きる張りを失っていたように思う．

梅雨も明けやらぬ６月末，碑文谷の円融寺で葬儀が営まれ，私は会葬者も少く淋しいお葬式であろうと思い，梅雨にしてははげしい雨の中をかけつけた．ところが寺の脇の葬儀場は，黒服の若い女性で埋めつくされ，あふれ，祭壇も亦彼女等の手向けた花々の香にみちていた．彼女は卒業後夫君他界のころまで田園調布雙葉で教鞭をとっていたので，教え子や同僚の人々であることがすぐわかった．きびしいけれどもユーモアもあり，相談相手にもなる良い先生だったに違いない．涙ながらの弔辞のあと，ランの一茎を柩に入れおだやかな死顔に接した時，彼女の晩年が決して孤独でなかったこと，祭壇近くに坐って居られる血のうすい肉身よりも，彼女のために涙したのは，数多くの教え子であったことを感じた．

また秋の終りころ姪の１人が結婚した．彼女は体育科の卒業生でずっと横浜の私立高校の教師である．体育の教師というのは殆んど日曜日も休めないほど多忙なものであるらしい．そのせいかどうか35才をすぎてもまだ独身で，地方に住む親は心配し乍ら半ばあきらめていたようである．それが前任校の先生のお世話で，やはり私立高校の国語の教師との縁談がまとまり，お見合後半年でスピード結婚ということになり，私共も出席した．若いカップルではないので，双方の親戚と学校関係の人だけ，というこじんまりした披露が中華街で開かれた．宴半ばに突然姪の勤務校の男女のバレー部員が姿をみせ，代表が祝辞を述べたあと，男子は新郎に，女子は新婦に１人ずつ紅バラを捧げ，最後に部員のサインボールが贈られた．姪はバレーボールのコーチとして相当の実績をあげているようで，このことは同僚の先生とバレー部員の相談によるもので，姪には全くのハプニングであったらしい．１人，２人，３人，５人とバラを受取っていく中にオレンジ色のドレスの裾をひいた姪の顔が崩れ，涙が筋となって頬を伝った．これは当日のイベントの中で，最も感動的なシーンであった．彼等がひきあげるころは姪も笑顔に戻っていたが，惜しみない拍手の中で教え子の手をとって涙したとき，彼女の心を満たしていた感慨は何だったであろうか．

私は最近身辺で起ったこの２つの出来事から，やはり教師は一生を賭けるにふさわしい職業であると思わずに居られない．本学の前身，女高師はいうまでもなく教員養成の学校であり，それは少なからず学生に圧迫感を，また世間に偏見をもたらした．戦後女高師は普通の大学となったが，それでも卒業して教職に就く者がかなりの数をしめた．新卒業生が１人も教師にならなかったのは昭和56年の29回卒業生をもって嚆矢とする．しかしこれは学生が教職を嫌ったのではなくて，教職に就くことが様々な状況の変化の中で，困難になって来たからであろう．多くの女性にとって教職ほど適し，そして恵まれた職場はないと，今も昔も考えている．教師の門が卒業生に対し大きく開かれることを祈ってやまない．